

情報リテラシ教育におけるプレゼンテーションとディベート

Presentation and Debate in Information Literacy Education

大曾根 匡[†]

Tadashi OSONE[†]

[†] 専修大学 経営学部

[†] School of Business Administration, Senshu University

要旨:

本論文では、情報リテラシ基礎演習におけるプレゼンテーションとディベートの手順について述べる。プレゼンテーションでは、箇条書きとビジュアル化の重要性を特に強調し、それを実現させる手法について記述した。具体的には、文章的な情報はチャートで表現し、数値的な情報はグラフで表現することを推奨した。そして、チャートの基本パターンとグラフの種類と使い分けについて説明した。ディベートは、ディベートの定義、ディベート準備、立論の準備と構成、反対尋問と最終弁論の準備、説得する方法について記述した。

Abstract:

This paper proposes a process for presentation and debate. In the presentation, we emphasized the importance of itemization and visualization. Specifically, it recommended that sentence-like information be represented by a chart and that numerical information be represented by a graph. Then, I explained the basic patterns of the chart, the kind of the graph and the proper use of graphs. For debate, we described the definition of debate, preparation for debate, preparation and composition of argument, preparation for opposition examination and final argument, and how to persuade.

1. はじめに

情報リテラシ基礎演習の教科書「グループワークによる情報リテラシ」[1]において、第7章のプレゼンテーションと第8章のディベートの部分を筆者は担当した。執筆にあたって、基本的には、それまでの教科書「ITテキスト基礎情報リテラシ」[2]の第9章のプレゼンテーションと第10章のディベートの内容を踏襲した。今回の教科書で注意を払った点は、第3章の情報の収集と整理、第4章の問題の発見と情報の分析、第5章の解決案の創出で示された内容を、プレゼンテーションやディベートにおいて取り入れ、スライドの具体例として示すことと、教科書全体を貫く「ごみ問題の解決」というテーマを織り込むことであった。本論文では、前の教科書との違いを中心に説明していく。

2. プレゼンテーション

プレゼンテーションの章の構成は、

7.1 プレゼンテーションとは

7.2 箇条書きによる表現

7.3 ビジュアルな表現

7.4 プレゼンテーションの準備

とした。そして、最初に、図1に示すフローチャートを示し、プレゼンテーションの流れを理解させるようにした。特に、フローチャートの横に2つの吹き出しを取って挿入したのは、プレゼンテーションの資料作成時は、

① 箇条書きによる表現

② ビジュアルな表現

の2点が大切だということを強調したかったからである。

7.2節における「箇条書きによる表現」においては、逗子・葉山版のタウンニュースに掲載された記事「家庭のゴミ処理の有料化」を題材として、箇条書きの例を具体的に示した。

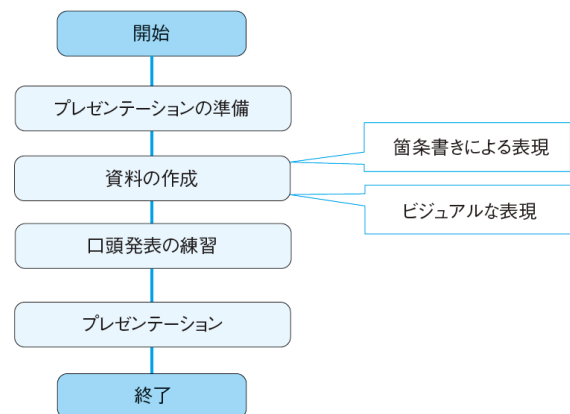


図1 プレゼンテーションの流れ

ビジュアルな表現では、チャートとグラフについて記述した。そして、文章的な情報はチャートで表現し、数値的な情報はグラフで表現することを推奨した。

まず、[3]に掲載されているチャートの分類を参考にし、チャート化するときの4つの基本パターン

① つなぐ：前後関係、因果関係、階層関係

② 仕切る：分類

③ 重ねる：集合関係

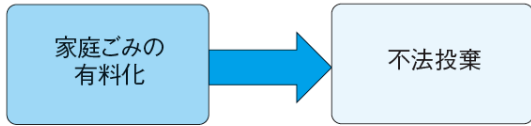
④ 包む：包含関係

について紹介した。そのチャートの基本パターンを図2に示す。そして、説明したい対象の関係に着目し、その関係から基本パターンの選択を行うことを学ばせるようにした。その具体例として、ごみ処理の流れに関する文章を読ませ、それを、チャートを用いてビジュアル化させる例題を提示した。そのビジュアル化したチャートを図3に示す。

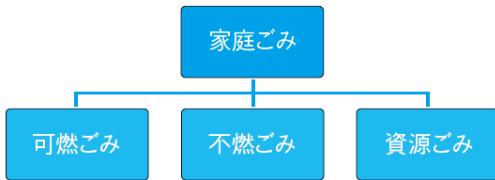
グラフとしては、

- ① 棒グラフ
- ② 折れ線グラフ
- ③ 円グラフと帯グラフ
- ④ 散布図
- ⑤ レーダーチャート
- ⑥ 2軸グラフ

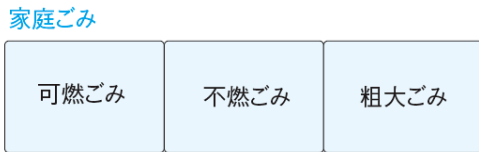
の6種類のグラフの種類を取り上げ、各グラフの特徴とグラフの使い分けについて説明した。



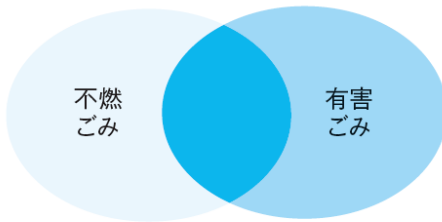
(a) つなぐ：前後関係や因果関係



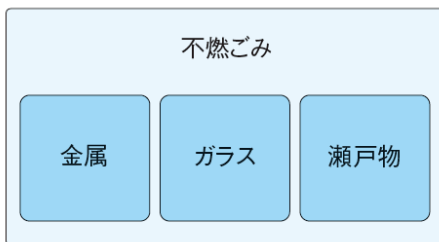
(b) つなぐ：階層関係



(c) 仕切る：分類



(d) 重ねる：集合関係



(e) 包む：包含関係

図2 チャートの基本パターン

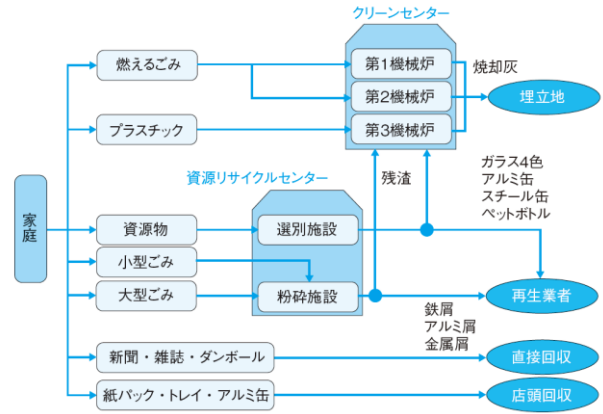


図3 文章のビジュアル化の例

グラフに関しては、そのグラフから何を主張したいのかを明確に示すことが大切であることを説明し、説明の書き込みをグラフ上に挿入することを推奨した。その具体例として図4のグラフを掲載した。

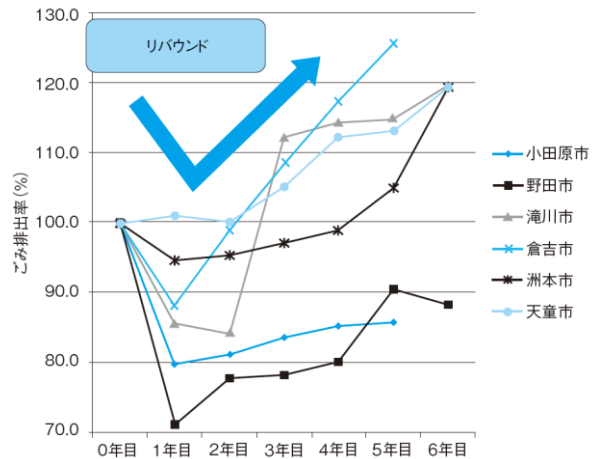


図4 説明の書き込み

最後の「プレゼンテーションの準備」の節では、準備の手順とスライド作成における留意点について説明した。次に、プレゼンテーションにおけるスライドの例を記述したが、その具体例を考えるのが大変であった。前著[2]では、厚生省の「健康日本21」という運動を題材にしてスライドを作成した。これは、その運動の報告書をまとめればよかったので、さほど苦労しなかった。それに対し、今回は、ごみ問題を題材とし、さらに、情報の収集と整理、問題の発見と情報の分析、解決案の創出といった一連の過程をスライドに反映させることが求められていた。その具体的なストーリーを考えるのに苦労したが、最終的にはそれをコンパクトに14スライドでまとめることができた。

「情報の収集と整理」としては、図5のごみ問題の現状を表したグラフを、「問題の発見と情報の分析」としては、図6のロジックツリーを利用した。「解決案の創出」としては、図7のロジックツリーと図8の解決案の比較表を使用した。このように、教科書で学んだことをスライドに取り組むことにより、ここがけてプレゼンテーションのスライドを作成した。

最後に、口頭発表の技術について説明し、この章を締めくくった。ここでは、姿勢、声、視線、動作についての注意点を記述し、情熱こそが最も大切であるということ強調した。

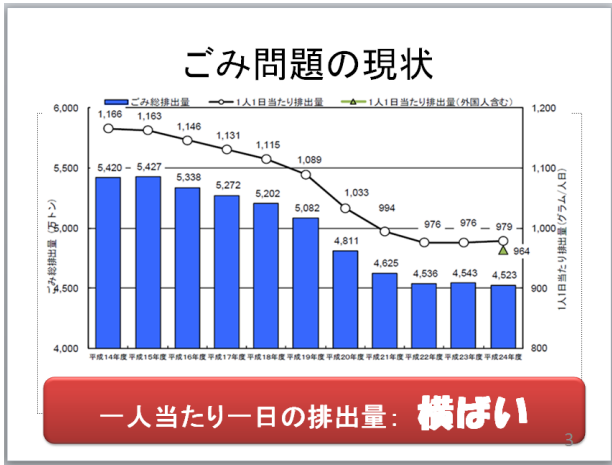


図5 情報の収集と整理に関するスライド

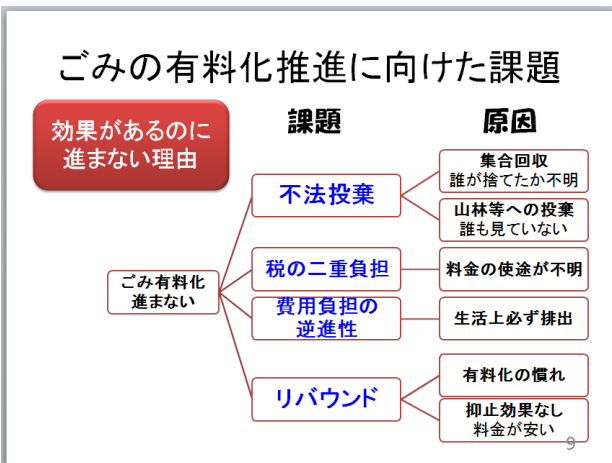


図6 情報の分析に関するスライド

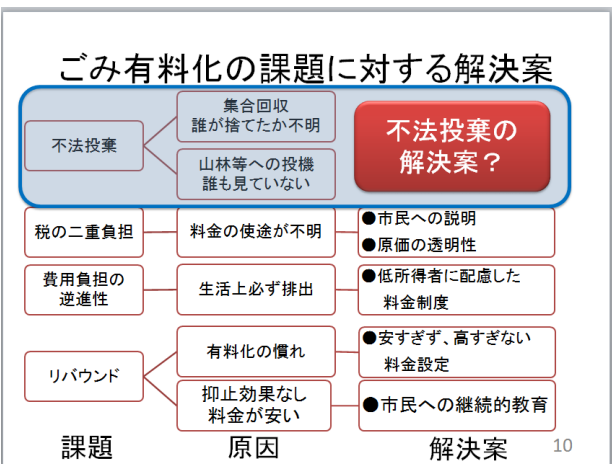


図7 解決案の創出に関するスライド

評価尺度	市民負担	自治体の負担	実現性	適用範囲	効果	プライバシー
住民	×	△ 教育・相談要	△ 自治会次第	○ 住宅街	△ 常時監視は困難	○
タクシー	○	△ 教育・相談要	△ タクシー会社次第	×	△ 常時監視は困難	○
監視カメラ	○	△ 監視員確保	△ 山間部は困難	△ 山間部を除く	○	○ 注意要
ガードマン	○	△ ガードマン確保	△ 山間部は困難	△ 山間部を除く	△ 常時は困難	○

図8 解決案の比較に関するスライド

3. ディベート

ディベートの章は、

- 8.1 ディベートとは
- 8.2 ディベートの準備
- 8.3 立論の準備と構成
- 8.4 反対尋問と最終弁論の準備
- 8.5 説得する方法

の5つの節で構成した。そして、最初に、図9に示すフローチャートを示し、ディベートの流れを理解させるようにした。

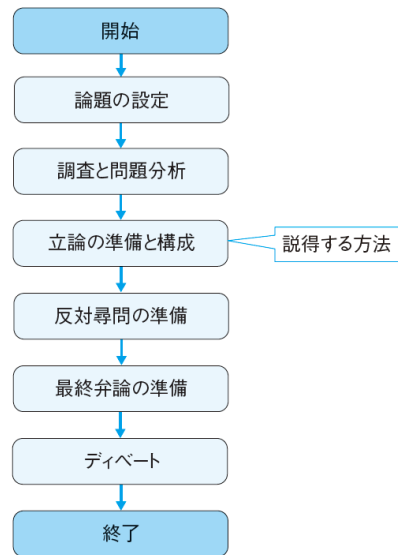


図9 ディベートの手順

最初の8.1節の「ディベートとは」の内容は、[2]の内容を踏襲し、ディベートの定義、ディベートの効用、ディベートの遂行方法、論題の設定について説明するようにした。

8.2節の「ディベートの準備」は、この教科書全体の流れに合うよう新たに書き下ろした。すなわち、

- ① 論題の理解
- ② 現状の調査

- ③ 問題構造のモデル化
- ④ 解決案の創出
- ⑤ 解決案の評価
- ⑥ ディベートの発表内容の検討

とし、この教科書全体の復習となるよう、すなわち、ディベートが情報リテラシの最終教材となるようこころがけた。

8.3 節の「立論の準備と構成」も新たに追加した項目であり、肯定側と否定側のそれぞれに対して、ディベートの準備の手順とスライドの構成について丁寧に解説した。論題は「家庭ごみの有料化は是か非か」とし、肯定側の立論スライドと否定側の立論スライドを、それぞれ例示して、学生の理解を助けるようにした。

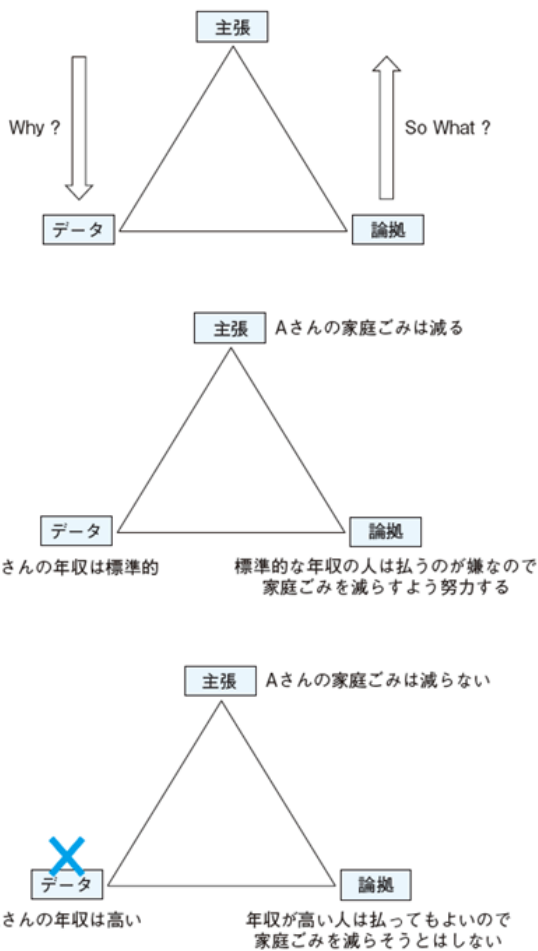


図 10 三角ロジック

「反対尋問と最終弁論の準備」の節も新たに執筆した。ただし、一般論しか記述せず、具体的な尋問と答弁のやりとりを示さなかったため、内容が十分に伝わらない危惧がある。実際、学生にディベートを行わせたところ、立論は熱心に準備し、発表もよくできていたが、反対尋問と答弁になると盛り上がり欠けてしまった。その理由を下記に示す。

- ① 何の目的で尋問するのかを明確に言わないので、意図が答弁者に伝わらず、論点がずれてしまう。
- ② 答弁に対しさらに二の矢、三の矢の尋問をしないので、議論が深まらない。
- ③ 論題に対して、どうでもよいような枝葉末節の尋問をするので、本質的な討論にならない。

④ 尋問に対し、認めるのか認めないのかを明確に答えないことが多く、認めない場合の論拠もきちんと示さないことが多い。

⑤ Yes か No かの尋問をせず、「これについてはいかがですか」という尋問が多いので、議論に迫力が出ない

同様に、最終弁論もあまりうまくなかった。これらのことを踏まえて、次回の改訂時は、尋問と答弁、最終弁論についてより具体的に記述するようにしたい。

最後の、「説得する方法」の節の前半は、[2]の内容を踏襲し、三段論法と論理について記述した。新たに追加した内容は、三角ロジックである。三角ロジックは、図 10 の上図のように、主張とデータと論拠を三角形で表現し、論理性をビジュアル化した手法である。三角ロジックは、主張を覆すためのヒントを与えてくれるので、紹介することにした。

例えば、「標準的な年収の人は、家庭ごみにお金を払うことは嫌なので、家庭ごみを減らすよう努力し、その結果、家庭ごみは減る」という主張は、三角ロジックでは図 10 の中図のように表現できる。この主張を覆すには、データの部分を否定して、「Aさんの年収は高い」とすればよい。このとき、三角ロジックは、図 10 の下図のようになり、家庭ごみは減らないという主張をすることができる。

4. おわりに

本稿では、プレゼンテーションとディベートの執筆にあたり、前の教科書との違いを中心に説明した。プレゼンテーションでは、チャートの基本パターンを紹介し、ビジュアル化の方法を理解させるようにした。また、情報の収集、問題の発見、情報の分析、解決案の創出という手順を具体化したプレゼンテーションのスライドを提示した。

一方、ディベートにおいては、反対尋問と最終弁論の準備についての記述を新たに加えた。また、三角ロジックの紹介をし、主張を覆す方法について説明した。肯定側と否定側の立論スライドも、それぞれ、新たに作成し、違いが分かるようにした。

反省点は、反対尋問と答弁の具体的なやりとりの記述をしなかったことである。前の教科書のディベートの章には、立論と肯定側による反対尋問の部分を掲載した。これにより、読者はディベートにおける反対尋問と答弁のやりとりを体験できた。今回の新しい教科書にはその部分がないので、反対尋問と答弁の迫力あるやりとりを読者に伝えられなかった。次回の改訂時は、この点を改善していきたいと考える。

謝辞

本稿の執筆にあたって、情報科学研究所の情報教育研究会での議論が役に立った。そのメンバーに感謝の意を表したい。

参考文献

[1] 魚田勝臣, 渥美幸雄, 植竹朋文, 大曾根匡, 関根純, 永田奈央美, 森本祥一, “グループワークによる情報リテラシ,” 共立出版, 2015.

[2] 魚田勝臣, 大曾根匡, 荻原幸子, 松永賢次, 宮西洋太郎, “IT テキスト基礎情報リテラシ 第3版,” 共立出版, 2008.

[3] 富士ゼロックス, “視覚表現がグッと良くなる一魅力的なチャート図をつくる一,” <http://www.fujixerox.co.jp/support/xdirect/magazine/rp1301/13011a.html>, 2015 年 10 月参照.